



現代ロシ...

今日のレジュメは今までのまとめっぽい。

三つの仮説が載っている。

・ 3つの仮説

1. ソ連では、経済成長と教育水準の向上に支えられて市民社会が育っており、ゴルバチョフとエリツインの民主化で新ロシアへ。民主革命説
2. ソ連では少数民族が迫害されていたため、ソ連体制の弛緩とともに反乱が生じ、ロシア民族の運動となり、ソ連が崩壊した。民族革命説
3. 民主化による多様な要求の噴出で政治体制が機能不全を起こし、ソ連が崩壊した。政治体制の機能不全説。

1991年の、ゴルバチョフの改革が煮詰まった段階で、新しい時代が始まる。ここでこの問題の解釈が非常に重要。一般的にいうとゴルバチョフの改革から、エリツインの改革までの課程を、第一の課程、そこでは市民社会が育っていて、ゴルバチョフの改革グラスノスチ・民主化、そういう改革を経て市民社会が熱狂的に反応して、そして新しい時代が始まり、一部の保守的な層がそれに反発してゴルバチョフを政治から排除して、最終的に民主化というものがエリツインによって引き継がれて新制ロシアによって実現される方向に行ったという解釈が、当時の新聞によってされていた。民主主義革命として1985-1991のソ連の崩壊の過程を考える、これが民主革命説。もし市民社会が育っていて、ある程度の民主主義的な政治をポリアーキーのような政治を実現できていたとすれば理解しやすかったのだが、生憎そうではなかったということである。

2番目の解釈、ソ連では少数民族が迫害されていたために、ソ連体制がゴルバチョフの改革とともに弛緩して、少数民族の反乱が生じた。それがやがて多数民族であるロシア民族の運動と重なってソ連は崩壊に導かれた。これは民族革命説、少数民族が革命を起こしてそしてソ連体制が崩壊した。「民族の牢獄説」、民族の牢獄が上からの改革のために弱まって、その結果として今まで不満を抱いていた少数民族が不満をぶつけて体制を破壊しロシアは崩壊したという説。これをやると、現在のロシアは非常に民族主義的な体質の強い国家、ロシア民族の国家となっている。でも実際はそれほど簡単なことは起こっていないくて、この民族革命説も大きな問題がある。先生はこの2つの説とは異なるような形で、1985-1991の課程を理解して欲しいらしい。

おそらくそうした民主革命や民族革命という視点でとらえた後に、1991年12月以降を考えるのは難しい。そういう形でとらえると現在のロシアの政治の形をとらえるのは難しいだろう。そういうことを先生は言いたいらしい。

これからの後半、国家が解体していく課程というのを話してゆく。

まず、ゴルバチョフの改革は経済の改革を進めるために、抵抗にあつて、それを打破するために言論の自由を認め、民主化を行わざるを得なくなって、民主化が進んだ。民主化を行ったのは確かだが、民主化を目的としたのではなく、あくまで経済改革のための手段に過ぎなかったし、経済改革も中途半端なものであった。政治権力のメカニズムが大きく変換していった、ゴルバチョフが改革によって大きく変えてしまった。

共産党のイデオロギーによる説得という手は、グラスノスチという政策を進めたことで機能しなくなった。ゴルバチョフは説得すれば人々は理解できると思っていたのかもしれない。しかし、グラスノスチという彼が始めた言論の自由の政策は、共産主義のイデオロギーそのものに挑戦することを許したのだから、人々はこの説得のメカニズムの認識をものともしなくなった。耳を傾けなくなってしまった。

第二に挙がるのが、権力手段による強制という手段もあった。何か反対すると逮捕・拘束されたりする、圧迫がある。そんな恐怖が、上に従おうという気持ちにさせていた。でも、民主化を一度行ったら、それはたとえある範囲までの民主化をすると決めていたとしても、範囲を超えた行為を強制(暴力)によって弾圧させたりしていたら、民主化によって人気を集めていると考えているゴルバチョフの信用が崩れることになる。民主化は一度始まってしまったら簡単に抑えることはできない。今でもなかなか改革ができない、専制政治の国があるが、そこでは民主化が危険であることを十分に理解している指導者たちがいていったん許すと今使っている強制的な手段は使えないかもしれないという恐れがある。ゴルバチョフは民主化を始めてしまったのだから、そうすると強制という手段は体制の影響力を確保するためには必要であるが、彼自身の名声を傷つけて、彼自身の影響力は弱めていくというジレンマに立たされるので、強制という権力手段は使いづらくなる。使いづらくなればなるほど、制裁の恐怖は人々から去っていき、何でも言って大丈夫、やって大丈夫と考えるようになる。どこまで許されてるかなんてわからないので、どこまでも進んでゆく。こうして2番目のメカニズムが動かなくなる。

3番目の報奨というメカニズムも、ノーメンクラトゥーラ制度を壊して、選挙を動かした瞬間にゴルバチョフは人事権捨ててしまった。人事権はものすごい力を持つのは知っての通り。人事権とは、人事権を握る人に気に入られるように動かこうという気にさせるものすごいものである。

このように、メカニズムは三つに渡って、ゴルバチョフ自身が弱めてしまった。政治のメカニズムが崩れていけば、政治過程のゲームのルールが変わってしまったことになる。ゴルバチョフは自分自身では、経済改革を進めるためにグラスノスチを始め、民主化を進めたのだが、彼自身は権力の頂点にあったのに実際には自分の権力は機能する力を失ってしまっていた。人々に強制する力、説得する力、誘導する力を持たない権力は、人々にとっては何でもないわけである。そうした形で、政治的メカニズムが動かなくなった状況では、政治課程というのはどう動くのか。どう見たらいいのか、それが今日の話。

今日の話は「団体」について。対立する要求がぶつかり合うようになっている、それを調停する政治的なシステムが動かなくなっている。求められる経済的な資源を奪い合っている状況で、それを調停する力がなくなっているという中で、人々は自分の要求を実現するために、人々を組織して多数の集団を作り上げるようにするわけだ。団体、ここで言う団体とは、主義主張が明確なアソシエーションが団体。これに似たものに集団があるが違うよ。共通の目的を持って持続的に活動する団体、この定義が重要。こういう形で集まると、いざというときには、政治的影響力を持つ。そのことをソ連共産党はよく知っていたので、共産主義建設の目的を持って活動する団体に限って設立加入を認めていた。北朝鮮からは団体のニュースを聞いたことはないだろう、それは自発的な団体は弾圧されているから。団体の持つ恐ろしさは、政治の権力を持つ者は非常によくわかっている。それが共通の目的を持って持続的に活動するとなれば、権力にとっては非常に邪魔、危険な存在であるからである。この後に起こってくる課程は、こうした団体と団体の争い、この視点で見ている方がよいわけである。

ソ連では団体というものを形成するのが非常に困難であった。共産党では派閥の組織が禁止されていたので、派閥を作ると除名・追放・逮捕される。ソ連共産党こそがもっとも政治活動に向けた人々を集めた最大の政治団体、でもゴルバチョフの活動に逆らおうとする人々が勢力を作ろうとすると、それは派閥である。その派閥は党首に逆らっている限り弾圧の対象になるので、政治団体が出てくるのは、最初の段階ではできなかった。次に考えられるのは実力を持っている軍部であるが、軍部でも、国家元首に逆らって集団を作ることは軍部の規律を乱すと考えられ、とてもできなかった。警察組織も同じ。ゴルバチョフが改革を始めた頃は、どれも反抗する団体を作ることができなかった。ロシア正教会は政治に関与することを極度に恐れていたのも、政治勢力として名乗り出ることにはなかった。

ではどんな団体が抵抗できるのか。それは、ソ連邦の連邦制度の中で保護されてきた民族集団である。連邦共和国に巣くう民族集団である。ソ連では、ソ連人であると同時に特定の民族に属するという二重のアイデンティティが生み出されて、連邦共和国や自治共和国などの少数民族地域では、その民族に属する者が出世しやすくなっていた。ソ連体制の中では、少数民族は存続することが許されるばかりか、その力を特定の場所では増大させることも可能である状況にあった。アメリカはインディアンをやっつける形で国を増大させていったが、ロシアは遙かに人間的に対応した。というのは、その民族集団のいるところによって、その支配集団に対して、「ロシア帝国の支配集団に入りなさい、そしてその領土もロシア帝国の一部に入れなさい」ということでロシア邸奥は膨張していった。その結果、ある領域では、ある民族がずっと一貫して存在しているという状況ができた。ソ連という体制は、そういう民族集団と戦わずにそのままロシア帝国の勢力・権力を維持しようと考えたので、どうしても民族地域が生まれていった。まさにこの民族地域こそが、同じ民族に帰属するという理由から、その権力を拡大したいという主義主張から、団体が生まれるのに最も適した土壌になった。最初に動き出すのは、その中でもソ連邦に最後に編入した地域、バルト地域であった。エストニアは150万人、ラトビアが250万人、リトアニア共和国が350万人。この三つの国々は、1940年にソ連に編入される。ちなみにヒトラーとスターリンが独ソ不可侵条約が1939年8月に結ばれる。これによってドイツも膨張したがソ連側も膨張した。そのときにスターリンが編入したのがバルト地域。1940年に初めて編入された。1980年代には独立国であったという認識している人たちがいくらかいる中で、いったん民主化が始まると民族をベースとした団体が形成されていく。これが政治団体の始まり。

	連邦レベル	共和国・地方レベル
1988年 10月		バルト諸国でサユージス（リトアニア）、人民戦線など政治団体が設立
1989年 3月	ソ連人民代議員大会選挙（エリツィンのカムバック）	
1990年 3月	ソ連憲法から共産党の一元支配を規定する条項削除	2月から3月、連邦共和国の人民代議員大会選挙。共産党の苦戦。リトアニアの独立宣言。ラトヴィアも続く。
1990年 6月		ロシア連邦共和国で、ロシア連邦共産党の発足
1990年 年10月	連邦法で、社会団税法成立	モスクワの映画館で、諸運動・組織を結集した「民主ロシア」の結成大会
1991年 3月	ゴルバチョフ、新連邦創出の是非を問うレファレンダム	
1991年 8月	新連邦条約締結の直前に、クーデター。ゴルバチョフ軟禁	

88年10月にはバルト諸国では政治団体が設立される。1939年8月に独ソ不可侵条約が結ばれてから、1989年8月までというのは、独ソ不可侵条約によって独立が奪われてから50周年という非常に記念的な年だったので、バルトの人々は、民族的なスローガンに動員することが非常に簡単であった。こういう政治団体に集う人々は50年前を思い起こせば、こういう形で反ソ的な言動を以て団体を設立していった。この後は、41年から独ソ線が始まるので、バルト諸国はドイツの占領下に入る。1944-45にかけて初めて、ソ連の赤軍がこの地域を奪い返すという事件が起こる。これはロシア人から見れば、バルト諸国をあのヒトラーの悪夢から解放した日であるが、バルト諸国の人々にとっては、ヒトラーに続いてソ連に占領された日である。

90年2-3月にかけて、今度は連邦共和国レベルで、15の連邦共和国でソ連邦はなっていたのだが、1989年に連邦レベルでなされたフリーの最初の選挙、ソ連邦の人民代議員大会選挙に対応する形で、連邦共和国でも同じ選挙がなされて、そこでバルト諸国では共産党勢力がどんどん倒れていく。人民戦線の議員が過半数を占めるようになる。反共産党勢力が過半数を占めるような状況になってしまう。

これは自由な選挙を行った結果、ゴルバチョフがノーメンクラトゥーラ制度を使わないで選挙を使おうとした結果である。これによって共産党上層部はゴルバチョフに憎しみを抱くようになる。150万人の国家の反抗運動は、以前は軍隊で周辺を固めて、数千人を殺す気になれば、押さえ込めたのだが、ゴルバチョフはそれをしようとしなかった。こうした結果として、団体は活躍していく。そのほかにも、ブルジョア（国）でも主権回復を求める運動が1989年になると広がっていき、そこではソ連軍が暴力的に解散させるという事件が起きる。死者まで出る。この事件をきっかけに、ブルジョア連邦共和国においても、1989.4以降に民族主義者の団体が生まれてくる。こうして団体を形成していく少数民族が生まれていった。しかし、そういう者が民族主義、少数民族だけであるというわけではない。労働者たちもクラブを作り、ストライキを展開してゆく。

・ ケメロヴォ州における1989年7月のストライキ運動

1989年7月以降	労働を停止した企業数	ストライキ参加者数
7月10日	1	334
7月12日	20	20600
7月14日	103	72700
7月16日	142	140000
7月18日	124	149200

以前は制裁が怖いのでやらなかった。でも、1989年の夏になると、労働屋の中でもっとも結束力・組織力の強い炭鉱労働者を中心にしてストライキの波が広がってゆく。ロシアの中でも南部の炭坑地域で起こったものを例にとると、大半の要求は、給料とか住居とか衛生状態とか生意気な行動する上司を辞めさせろとかいう、経済的な要求であった。経済的な要求を抱える集団が生まれて、それが各地でストライキをやっても潰されない、潰された後にも強烈な制裁を受けないと考えた労働者たちが立ち上がっていき、次から次に政府や省庁・役人に圧力をかけて自分たちの経済的な要求を勝ち取るという事件が起こった。1990年になるとこの後は収まっていく。なぜなら、連邦政府がお金をつかまえるから。でも、やっぱり時間がたつと、労働者に悪いような状況がまた再発する。すると、1990年の夏から秋にかけてもう一回この運動が再発する。こうなると政治的な要求も入ってくるのだが、でも労働運動は政治的要求を加味すればするほど分裂していき、「ゴルバチョフを支持しろ、やっつけろ」とかの政治的要求を加えていけば行くほど、労働組合は分裂していき、しかもストライキによって得られるお金も減り経済状況も悪くなり（政府による掴み金もなくなる）、活動するのはますます困難になる。労働運動はある意味で山猫ストライキのような形で起こるようになる。民族運動だけではなく、様々な勢力が組織・団体を作って自分の政治的・経済的要求を勝ち取ろうとして政治課程に入ってくる状態になって初めて、ロシアで政治団体の結成の動きが広がっていく。ソ連体制の中では、ロシアの中だけがソ連は特別扱っていて、ロシアは非常に危険なので、共産党を作ることを許さなかった。ラトヴィアとかは許していたのに、ロシア人に対してはロシア連邦共和国の共産党を作ること

はソ連体制は許さなかった。恐いから。ロシア人という巨大な14,500万人もいる人たちがソ連に変わる共産党を作れば、それはソ連にとっては恐ろしい存在になるので、それを許さなかった。でもさすがにここまでくると、ロシア連邦共和国にいる共産党員たちもロシアナショナリズムと結びついて自分たちの影響力を作り上げようとする動きが起こる。共産党と民族主義というのは簡単には結びつかないのだから、不思議な組み合わせであるが、ここにロシア連邦共産党が発足していく。

こういう動きと対抗する動きの中で出てきたのがエリツィン。85年のゴルバチョフ政権が発足したときに政治局に入る。抜擢されて入る。民衆の人気を煽って行動するのが得意だったので、すぐに保守派と喧嘩、解任される。ここで終わったかというとうとう。1989年3月にゴルバチョフが人民代議員大会という形で選挙を行ってくれたおかげでも、ここで奇跡的にカムバック。ソ連共産党と戦うことを選んだ勇敢な人物として評価され、圧倒的な支持を得て選挙で選ばれて、人民代議員に選ばれる。そして翌年、連邦共和国レベルで同じように人民代議員大会が開かれたときに、彼はもう一回鞍替えして代議員として立候補する。これは彼のスローガン確立の上で非常に役に立った。①ロシア連邦共和国の自主性の回復(独立)、②共産党支配の打破、③市場経済の導入(ゴルバチョフのようにゆっくりではなく一気に市場経済を導入してロシア経済の問題を断ち切る)であった。このスローガンを実現するには、ソ連邦の人民代議員大会で活躍するよりも、ロシア連邦共和国の人民代議員大会で活躍する方が重要であった。彼はロシア連邦の人民代議員大会から、最高会議の議長になり、91年にはロシア連邦の大統領になる。それはソ連邦を構成する一つの共和国であるが、実質的には遙かに求心力のある勢力になったので、まさに91年になるまでにゴルバチョフの最大のライバルとして着々と動き出す。かつてゴルバチョフに見いだされて、手を組み、しかしゴルバチョフの中の政治闘争の中で対立して排除されるという屈辱を味わった男は、ゴルバチョフが作ってくれた機会を見事に掴んで、3つのスローガンを掲げて政治的にカムバックし、そしてゴルバチョフに代わる人物として登場するわけである。

やがて、政治的な運動だけではだめなのであって、やはり政治団体を結成してゆく必要があるとして、1990年の10月に民主ロシアという団体を結成しようとするが、非常に多くの集団、キリスト系とか共産党の民主的な改革を目指す集団など雑多な集団が集まったため、長続きはしなかった。でも、こういう形で団体を結成する。そうするとロシアレベルで言うと、ロシア連邦共産党というような勢力が、ロシアナショナリズムに結びついている。それとは違ってエリツィンの勢力はもう少し共産党に対抗するという性格を明確にしている。そういう勢力が民主ロシアとして浮かび上がってくる。ソ連というレベルでは、ゴルバチョフの改革を推進すべきだというゴルバチョフ支持派がいる。彼らは「連邦体制を維持すべきだ、エリツィンのように連邦を壊してしまうような動きをすと大変なことになる。連邦が経済的な結合関係、つまり長い人的な縁故のある人たちがたくさんいる共同体なのに、それを壊すつもりか。エリツィンのように連邦共和国の共和国だけを強めるようなことは危険だ、反対だ」このような、ゴルバチョフの支持派がいる。

[板書]

エリツィン⇔ロシア共産党

ゴルバチョフ⇔ソ連共産党保守派

連邦維持 ソ連体制の維持

斬新的経済改革

連邦レベルでいえば、ソ連共産党の現状を維持すべきであると考え、ゴルバチョフを除いたソ連共産党の一勢力、そしてゴルバチョフを支持する勢力。そしてロシア連邦共和国のレベルでいえば、エリツィンの勢力とそれに対抗するロシア共産党のグループ。この四つは様々な問題で一致する部分としない部分がある。改革を全体として進めてゆくべきだという点ではゴルバチョフとエリツィンは大体方向が似ている。でもゴルバチョフは経済改革はゆっくり進めてゆくべきだし連邦は維持されるべきだと考えている。それに対し、連邦は維持するべきだけれども、経済改革は必要ないという勢力と、これだけ少数民族が威張りだしてきたのなら、最大の民族であるロシア民族の要求をもっと前面に打ち出すべきだと考えるロシア共産党勢力がある。このロシア共産党勢力というのは、ロシアの利益を優先すべきだという考えの元では似ていないわけではない。こうしてソ連共産党の中に様々な分裂が起こった。かなりの勢力が分裂し、そして動き出す。1990年後半になると政治過程は非常に凹んだものになる。各地の連邦共和国で、民族共和国・民族自治共和国でそれぞれ要求が噴出してきている、これらの要求をめぐる紛争に連邦政府は明瞭な回決を与えることができなかった。リトアニアが独立したいといっても、はいどうぞ、ともできないし、弾圧することもできなかった。炭坑夫の要求に対しても、一時的な、その場限りの回答しかできなかった。彼らに対して恒常的に経済的な援助を与えるということは、一方で経済体制が混乱してきている状況ではできなかった。せいぜいできることは、お札を印刷して、価値が下がったお札をあげて物事を処理する。それでは問題の解決にはならなかった。この状況で、保守的なソ連共産党勢力、ゴルバチョフを支持する穏健的な連邦維持派勢力、ロシアナショナリズムを隔離して政治体制の再編を目指すロシア共産党勢力、そしてエリツィンを中心として反共産党・急進的市場経済改革の遂行を目指す勢力が対立していて、ソ連体制は機能不全状態に陥っていく。

ゴルバチョフはこういう状況でも、連邦を維持することが一番大事であると考えて、ゴルバチョフは連邦共和国の中の、ソ連邦を構成する様々な国でレファレンダムを行い、新連邦条約を作るためのレファレンダムを行い、ここで一定の成果を得て、バルト三国

とかは出て行き、残りの9カ国にもっと権限を与えて新しい連邦体制を作って、連邦体制の再建をしようとした。それは今までソ連邦の体制を築いてきた中核を担っていた勢力、既得権益を持っていた勢力にとっては大変なことである。自分たちの既得権益が吹っ飛んでしまうのだから。ソ連のKGB、内務省大臣、経済官僚、軍の上層部とかは新連邦条約の形成に非常に危機感を抱いたので、1991. 8. 15にクーデターを起こした。これが国家非常事態委員会によるクーデターである。ゴルバチョフは実はクリミアで保養中だったので家族と一緒に軟禁されてしまう隔離されて逮捕状態に置かれてしまう。それに対しエリツィンはなぜか非常事態委員会を作った人たちが漏らしてしまって、自分は反対するという形で体を張って出てきたことで、そのクーデターに対抗する姿勢を示した。兵士たちはエリツィンに銃を撃ちたくないと考えたので、国家非常事態委員会の命令を聞こうとしなかった。軍隊が寝返ったときは権力が交代するときである。軍隊が寝返ったことによりこのクーデターはあっけなく失敗に終わったわけだ。何が言いたいかというと、これでソ連の崩壊は決定した。当然ソ連邦を構成していた上層部、国防大臣とか内務省大臣とかKGB議長とかが入っていた国家非常事態委員会が崩壊した後、ソ連邦の権威が失墜するのは当然である。自分が選んでいた部下に簡単に軟禁されてしまって手も足も出なかったゴルバチョフの権威もこの時点で完全に失墜した。これでソ連邦は終わりである。1991年の12月にソ連が終わって新しい時代が始まる。

我々は当時の新聞報道から、いろんなイメージでこの1985-1991の自体をイメージしている。しかし、今言ったことからわかるとおり、ここで起こった事柄は、民主化によって体制が機能不全を起こし、たくさんの要求が一気に出てくる。炭坑夫とか民族集団とか。そういう集団が自分の要求だけを押しつける。それをどうやって優先順位をつけるのか、どうやって処理するのができないような体制は、機能不全を起こす。そういう機能不全を起こしていた体制が、最終的に最後の麻痺状態を示すように、上層部がクーデターを起こして崩壊していった。ここには確かに一部の民主化の動きが起こっていた。しかし、市民社会というような、広い層に支持された、民主的な運動であったと考える必要はない。むしろそれに対抗する勢力はいたし、そういうものを全く無視して自分たちの経済要求をするものもたくさんあった。ここに起こったものが少数民族による民族革命であったという側面も、バルト諸国のような一部の地域では見られたが、2億8千万人いるうちのたかが800万人の少数民族の運動は、体制を瓦解するほど強いものではない。なので、少数民族の対抗がこの体制を瓦解させたというはおそらく誇張以外の何者でもない。だから、当時の新聞や新聞に基づいて書かれているようなもののこの時期のまとめ方は、おそらく91年以降の事態を考えるには邪魔である間違いである仮説だということだ。

団体ということだけに注目することで考えるのは、現代のロシアの政治を考える上では最初の出発点として重要だということである。おわり。

貼り付け元 <<file:///I:/授業ノート2年生/現代ロシア論/現代ロシア論6・14.doc>>